



(Theater) – Takuya Murakawa

(演劇) — 村川拓也

Hans-Thies Lehmann

ハンス＝ティース・レーマン

昨年の公募プログラムで大きな反響のあった村川拓也『ツァイトゲーバー』。彼が舞台上に出現させたものは何だったのか？ 演劇理論家・評論家ハンス＝ティース・レーマン氏が、村川の演劇的企てを分析する。

何か特殊なことがおきていると感じる、何かを変えてしまうような、通常と違う演劇のタベがある。そんなタベは、「ライブ・ショー」としてわれわれを楽しませることはあっても、深い痕跡を残さない、演出効果を多用した大スペクタクルであることは滅多にない。

演劇の可能性が汲み尽された場所で、観客である私が、同時に参加者になるという出会いの瞬間、いわば「親密な」ごく短い瞬間にある「例外」が、この特殊な経験となる。

たとえば、高山明やエジプト出身のライラ・ソリマン、そして村川拓也のもとでは、演劇はカストロフとアンガージュマンに対する意識から生まれ、そのことが彼らに関心を抱かせる本質でもある。逆説的に言えば、演劇の必然性に気づかされるのは、こういった仕事のなかで演劇そのものをラディカルに疑問視したときなのだ。演劇はショーやリプレゼンテーションであることをあきらめ、共有されながら体験するプロセスとなる。それはわれわれの孤立や別離を止揚はしないが、この止揚を要求することによって余地が生まれる。芸術は、ヴァルター・ベンヤミンの定義によれば、まだじゅうぶんに受け入れられる時を迎えていない需要を生み出すものである。演劇の芸術は潜在的に美学上の問題にとどまるものではない。ここで興味深いのは、どこにその美学的自律を賭しているのか、どこにその命と「世界の叫び」(ハイナー・ミュラー)を内に究めてゆくのかである。

連帯や人間性をテーマとする演劇の実践

演劇は常に約束—ただし最後まで守られない—の瞬間でありうる。病気や衰亡や自然災害、そして人間自身が引き起こした破壊などの不幸に対して人という種が「結束する」瞬間、共同体の瞬間なのだ。

村川拓也は、演劇とは何か、何であり得るのかを問いかけている関西出身の若手演出家であり、ドキュメンタリー映像作家である。あるインタビューにおいて、彼は、トラウマ克服の遊びをする震災被害者の子供たちが印象に残ったと語っている。誰かが「地震だ！」と叫ぶと全員が机の下に隠れる。ほかの誰かが「津波が来る！」と叫ぶと、全員が机と椅子によじ登る。村川にとって演劇はショックを克服する遊びの実践だ。それは同時に、連帯や共感する人間性をテーマとする実践でもある。私は昨年 F/T アワード審査員として『ツァイトゲーバー』を観た。約1時間、私の理解が正しければ本物の障がい者介助者である工藤修三が、全身介護者に対するのと同じ内容の仕事を見せる。

ツァイトゲーバー (Zeitgeber)
演出：村川拓也

本物の介助者でもある役者が、舞台上に上げられ、全身介護者の役を演じさせられる一般の観客と対話をする。介護する／される身体を、労働の目的からずらし、舞台上に再現することで、目的を失った「労働」から何が生み出されるのかを考えさせる。

F/T11公募プログラム参加作品 『ツァイトゲーバー』演出：村川拓也



空っぽの舞台上にあるのは、2つの折りたたみ椅子と1本のマイク、前方に置かれたステレオシステムのみ。舞台上に障がい者はいないのだ。演出家が登場し、観客の中にいる女性1名に舞台に参加してほしいと頼む。彼はその女性に、何もしないこと、三度だけ簡単なセリフを言うことに同意を求める。しばしの躊躇の後、ある若い女性が障がい者の「役」を引き受けた。彼女は、自分で選ぶことのできる2、3か所のポイントで、大いなる願いごとを発言するだけだ。教訓的、道徳的な演劇を味わさせられるのではないか、テレビが絶えず流しているような「感動的な」ドキュメントを見せられるのではないか、と不安に感じるかもしれない。しかしそんなことは何も起こらない。

時間を他人に与える行為そのものを見せる

なぜならばこの公演はドキュメントすることから距離を置いているからだ。工藤は完全な客観的冷静さによって、無味乾燥にすべてを見せる。トイレ介助や患者の体を拭くなど、行動だけでなくその「痛み」さえも、まったくもったいぶることなく、静かに、シンプルにデモンストレーションする。それはプロセス—演劇であったし、そうありつづけた。政治的あるいは道徳的な訴えへと変わることはない。演劇は見せたことを語り、沈黙する。言葉とその欠落は印象的な瞬間だった。障がい者がただ一つ動かせるものであるまぶたが動き、その信号を確認し、食べたい食事がわかるまで、介助者はアルファベットを一文字ずつ何度もでも繰り返し、綴ってゆく。一風変わったドイツ語のタイトル「ツァイトゲーバー（時を与えるもの）」はまさにその通りである。この作品が示すのは時間を他人へ与えることだ。生産を目的とする仕事でも、近年のマルクス主義的分析でテーマとされる「非物質的

な」仕事でもなく、他人に接し、他人のために行なう人間の行動としての仕事であり、それ自身が目的である人の生命活動としての仕事である。暗黙の政治的「美学」であり、資本主義社会の生活形式に対する活発な批判である。村川は今後も、これまでの演劇にとどまることなく、しかしその演劇独自の可能性を用いることで、われわれの生活や日常、特に、現実の言葉の不足を、最初のときのように、距離を置いて認識させてゆく。彼の新作『言葉』は、意味、声、文字、身体的ジェスチャーの間での言葉の喪失と発見を再びテーマとして見出したものであり、彼の演劇研究を先へと進めていくものになるだろう。

(翻訳：田原奈穂子)

ハンス＝ティース・レーマン(演劇理論家・批評家)

1944年ドイツ生まれ。ドイツ語圏における現代演劇研究の第一人者。フランクフルト大学教授。99年に発表された演劇理論書『ポストドラマ演劇』は現在18カ国語に翻訳され、世界の演劇潮流に多大な影響を及ぼしている。また前任のゲーゼン大学応用演劇学科からはリミニ・プロトコルやルネ・ボレシュなど多くの才能が輩出され、教育者としても高い評価を受けている。

言葉

演出：村川拓也

11月8日(木)～11月11日(日)

於：東京芸術劇場 シアターイースト

社会や人間のありよう、その矛盾に向き合う実験的な作品制作を続ける演出家、村川拓也。震災に関するドキュメンタリー映画の制作を通じて、言語に対する欠落感、限界を実感した村川は、現在を言葉がリセットされた更地と見立てた。舞台は被災地を旅した俳優たちと、その言葉を訳す手話者等の対話で構成される。それぞれに異なる表現手段、話法を持った人々の、繋がりやすれ違いを追いながら、私たちは改めて、言語の持つ意味や可能性を知ることになるだろう。

